ヴァンパイヤー風雲録

九鬼鴻三郎の冒険 2

笠井潔

KADOKAWA NOVELS

KGB諜報員として東京へ潜伏した九鬼。
東西勢力の接点に渦巻く策謀、炸裂する
白熱の書下しSF伝奇アクション

KADOKAWA NOVELS

ヴァンパイヤー風雲録

九鬼鴻三郎の冒険 2

笠井潔

业学院图书馆
藏书章

カドカワ ノベルズ

平成二年一月二十五日初版発行

著　者　笠井潔
発行者　角川春樹

ヴァンパイヤー風雲録
九鬼鴻三郎の冒険 2

印刷所　旭印刷株式会社
製本所　株式会社鈴木製本所
装丁者　岡村元夫

発行所　株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三　振替東京三-一九五二〇八
〒一〇二　電話　営業〇三-八一七-八五二一　編集〇三-八一七-八四五一

Printed in Japan 落丁・乱丁本はお取替えいたします
ISBN4-04-771613-8　C0293

目次

序　章　顔のない女——東シベリア　9
第一章　失踪した男——マミーブルー　22
第二章　誘拐された女——ボストン・クラブ　67
第三章　脱走した男——カウンター・ゲリラ　105
第四章　売られた女——サラマンダー　143
終　章　名前のない男——九龍城塞　180

序章　顔のない女――東シベリア

ひどい寒気で、体の芯まで凍りつきそうだ。身ぶるいしながら目醒めたとき、ひび割れた唇から洩れてきたのは、「寒い」という日本語だった。

無意識のうちに日本語の呟きを洩らすなど、最近ではあまりないことだ。数年におよぶ猛烈な強制学習の結果、いまでは夢まで外国語でみる。KGBの上級訓練学校では、各種の実技訓練とおなじ比重で、各国語の習得が強制されるのだ。

現地の言葉をあやつれるかどうかは、拳銃や爆弾を使いこなせるかどうか以上に、敵地に潜入した破壊工作員には決定的な問題になる。それが生死をわけることも稀ではないのだ。

訓練学校では射撃や格闘術の腕と同等に、各国での生活能力をふくめて会話能力が重視される。

最初は、まず集中的に叩きこまれたロシア語の夢をみた。二年目からは、英語やフランス語の夢をみるようになった。最後には、夢のなかで複数の国の言葉が混濁するようになる。夢のなかでも、相手の喋る言葉にあわせて、おなじ言葉で自然に喋りだしているのだ。

だが、ここには外国人はいない。二本足で歩く動物など、東シベリアの大森林地帯に降下してから今日まで、一度も見物したことがない。生きて目的地にたどりつけなければ、人間の顔をおがめるような機会など、二度とないものと覚悟しなければならない。

過酷きわまりない生存闘争が、もう五日間も続いている。ナイフ一本で野生獣を狩り、かつかつで腹を満たしながら、ひたすら道もない森林地帯を歩き続けてきたのだ。

どうやら、シベリア奥地の過酷な自然環境こそ

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

本当の敵だという認識が、無意識の底にまで及んできたらしい。覚醒した瞬間に日本語が洩れたというのは、それが骨の髄まで浸透してきた結果だろう。

東シベリアの奥地では、言葉など意味をもたない。射撃や格闘術や、血のにじむ努力で習得した各種の破壊工作技術さえ、生存を保証するわけではない。ここは、ようするにクロマニヨン人とかわらない水準で、極限的な生存能力が試される秘境なのだ。

「寒い」という言葉は浮かんできたが、依然として全身の感覚が鈍い。しばらくのあいだ、なにをする気力もなく、冷たい大地に四肢を投げだしていた。のろのろと頭脳が回転しはじめる。

雪なのだ。大地には薄く、白い新雪が積もっている。空は暗澹とした鉛色の雲に覆われ、いまも小雪まじりの強風が吹きすさんでいた。

雪をはらい落としながら、おれは緩慢な動作で身を起こした。ここは東シベリアの高緯度地帯なのだ。九月末に降雪をみたとしても、驚くほどの事件ではないだろう。

雪で顔をこすると、ようやく頭が冴えてきた。朝食には兎の生肉がある。罠で、昨日の午後に捕らえた獲物だ。サバイバル・ナイフで肉片をそぎとり、口に運びはじめる。筋ばかりで、肉片はなかなか噛みきれない。

半匹分の生肉を腹におさめてから、拳で、口許にこびりついた血と脂をぬぐう。着ている野戦服は垢だらけ泥だらけ、髪はぼさぼさ、髭はのび放題だ。

この恰好で人里に降りたら、村人はみな、山賊の襲撃だと思いこんで逃げまどうだろう。泡を喰って、発砲するやつもいるかもしれない。

逆上した村人に射殺される危険。だが、そんなことまで心配することはない。半径二百キロ以内に、人間が生活している集落はひとつも存在しな

いのだ。

KGB上級訓練学校では、例年、卒業試験として訓練生にサバイバル・テストを実施する。今年は、五十名ほどが参加した。

訓練学校は、第一および第二の破壊工作課、軍事工作課、情報工作課、等々、専門別に縦割方式でクラス分けされているから、五十人のなかでも顔みしりは十名ほどしかいない。残りの連中とは、卒業試験ではじめて顔をあわせたことになる。

おれが籍をおいていた破壊工作第一課でも、アパートの鍵のあけかた程度は教えるが、金庫破りのテクニックはカリキュラム外ということになる。それはハイテク盗聴機器の扱いや、暗号通信技術とともに情報工作課の専門分野なのだ。

また、暗殺、誘拐、爆破などの技術と、軍用機や軍用船舶を奪取したり破壊したりする能力も、重複部分はあるにせよ領域がことなる。それには専門的な軍事知識が要求されるため、軍事工作課の担当ということになる。

サバイバル・テストに参加する訓練生は、全員、KGB専用機でモスクワ郊外の訓練学校からヤクーツクの空港に運ばれた。それからヤクーツクの秘密基地で、卒業試験について教官から説明をうけることになる。

ヤクーツクから軍用の大型ヘリコプターで、東に五百キロほど飛ぶ。眼下は見わたすかぎり、太古から人間の侵入を阻んできた針葉樹の原生林だ。

タイガを切りひらいて円形に、ヘリの臨時発着場が造られている。そこに集落があるわけではない。大森林の奥地に、ヘリコプターが降りられるほどの、円形の空き地が造成されているだけだ。

臨時発着場を中心に、半径百キロの円を描いてヘリが飛行しはじめる。訓練生は円軌道のどこかで、教官に指示され、地上にパラシュート降下しなければならない。どこに着地しても、臨時発着

場までは直線距離で百キロある。
徒歩で発着場まで帰投するというのが、サバイバル・テストのカリキュラムだ。訓練生は東シベリアのタイガを、直線距離で百キロ、踏破しなければならない。太古そのままの原生林に道はない。おまけに、途中には湖沼や湿地帯があり、楽には越せない山、渡れない谷が無数にある。
テンやキツネを追って、何か月も里にもどらない地元の猟師なら、なんとかやりとげるかもしれない。専門的な訓練をつんだプロの登山家でも、やれないことはないかもしれない。
だが、猟師でも登山家でもない普通人では、まず不可能だろう。たちまち方向を見失い、谷に転落し、沼にはまり、十キロも行かないうちに遭難死という結果になる。危険は、それだけではない。シベリアオオカミをはじめ、このあたりには多数の猛獣が生息しているのだ。
世界中から素質を評価されて集められ、キャンプで徹底的に訓練されてきた連中だ。体力と生存能力には自信がある猛者ばかりだから、ヤクーツクの基地でテストの中身を説明されても、それだけで悲鳴をあげたやつはいない。
問題は条件だ。Cグループは、テントや携行食など充分な現代的装備が支給される。ようするに、プロの登山家とおなじような条件でチャレンジすればいい。
Bグループは、それより劣悪な条件が課せられる。地元の猟師とおなじ程度といえばいいだろう。最新式の羽毛服はだめでも、昔ながらの毛皮の上着は支給される。
どちらも、武器として拳銃の携行が許可されている。これなら、上級訓練学校の教程を残らずマスターしてきた連中だから、ほとんどが目標地点まで辿りつけるだろう。脱落して死んだりするのは、よほど不運なやつで、まあ十人に一人というところか。

ここまでは納得できる。無茶苦茶なのは、最優秀生が選抜されるAグループの条件だった。

支給される装備はサバイバル・ナイフとコンパスだけ。軍用ヘリから、野戦服ひとつで放りだされるのだ。これでは、陸軍特殊部隊のサバイバル訓練より十倍も過酷で、ほとんど死刑を宣告されたに等しい。

Aグループに選抜されたのは三人きりだった。名前を呼ばれ、おれを含めて三人の最優秀訓練生が教官の前に整列した。

訓練学校で頑張りすぎたことを後悔したが、どうしようもない。訓練生は、教官のグループ選抜に不満があれば、ランクを下げるよう申し出ることもできる。それは可能だが、結果として卒業試験の成績評価は致命的に下落する。

成績なんかどうでもいいが、気になるのは、あまり恰好がよくないことだ。なにしろ、臆病風に吹かれて教官に泣きつくわけだから。

おれは左右を窺った。右手の男も左手の女も、直立不動で教官の顔を見つめている。男は白人でカール、女は東洋人でルーホアと呼ばれていた。どちらも暗号名で、もちろん本名ではない。

名前から判断すれば、カールはドイツ人、ルーホアは中国人というのが妥当な線だろう。しかし、なにしろ偽名だから正確なところは判断のしようがない。金髪のカールは、どのゲルマン系民族の出身だと称しても通りそうだし、ルーホアの方は、正体が朝鮮人、ヴェトナム人、あるいは日本人であろうと少しも不思議ではない。

カールは破壊工作課で顔なじみ、というより腐れ縁の相手だ。どうあがいても、実技の成績ではおれにかなわない。いつもおれが首席、やつが次席なのだ。それで白人の優越感を逆なでされたのかもしれない。やつはことあるごとに、おれにからんできた。

売られた喧嘩で、血みどろの私闘を演じたこと

も二度や三度ではない。体格にふさわしいタフな野郎で、幾度ぶちのめされても懲りないのだ。

ようするに、ヒトラーに「ブロンドのライオン」と賞賛されたタイプの、ゲルマンの野蛮人の裔だろう。

全身、マンガのレスラーみたいに隆々たる筋肉で、顔のほうも「ブロンドのライオン」だから、決して醜男ではない。しかし、青い眼には冷酷な光がやどり、知性のひとかけらも感じさせない残忍な顔つきをしている。

ルーホアという女のことは、よく知らない。卒業試験が初顔あわせということになる。ただし、最初から印象は強烈だった。なにも美人だからではない。むしろ「顔のない女」とでもいうべきだろう。マルコという気のいいマルティニック人は、つらそうな顔をして、なるべくルーホアの方は見ないようにしていた。

マルコよりも遠慮のないおれは、ルーホアの顔を納得できるまで観察した。それは、ふためと見られないほど無残に破損していた。大火傷のせいだろうか、顔面に大きなひきつれがあり、鼻筋がゆがんでいた。瞼と唇は、ひきつれのために吊りあがり、皮膚にはぶつぶつした青黒い斑模様がある。

まだ二十歳をいくらも過ぎてはいまい。小柄だが、しなやかで、美しい体つきをしていた。胸も腰も脚も、シルエットだけ見れば、どんな男でも抱きしめたくなりそうな流麗な線を描いていた。それとの対比で、破壊された顔の印象が、さらに無残に感じられるのだ。

上級訓練学校には、各国から若い美人ばかりを集めた情報工作三課というクラスがある。そこには日本人の女もいた。ようするに、色じかけで情報をとるエキスパートの養成クラスだ。この顔だから、ルーホアが、情報工作三課に在籍していたとは考えられない。

そもそも、このクラスの訓練生には、サバイバル・テストは免除されているはずだ。国家が金にあかせて養成した高級娼婦に、サバイバル・テストはふさわしくない。彼女たちの戦場は、シベリアのタイガではなく、あくまでもベッドの上にあるというわけだ。

とすれば、破壊工作二課の出身だろう。女の破壊工作員を養成するのが二課だから、そこで最優秀の成績をおさめれば、サバイバル・テストでAクラスに選抜されても不思議ではない。

この顔は、あるいは訓練中の事故のせいかもしれない。破壊工作課の実習では、プラスチック爆弾もあつかうし、ナパーム弾もあつかう。高温で燃焼するナパーム弾の飛沫が、もしも事故で顔にでも飛んでくれば、こんなひどいことになるかもしれない。

カールもルーホアも、教官のAクラス選抜という決定を、それぞれに無言で受諾したらしい。カールは厭味なほど自信満々に、ルーホアは死者のように動きのない顔で。

おれが拒否権の発動を我慢したのは、横にいたカールの野郎のせいだ。もしもBクラスに格下げして欲しいと申し出れば、やつは犬の糞でも見るような眼つきで、おれを見下すに違いない。

公の成績でも、課外の私闘でも、いつも血反吐をはかせてきた野郎だ。九鬼鴻三郎が、こんなゲルマン土人の侮辱に耐えるべきだろうか。もちろん、考えるまでもないことだ。回答は、否。それ以外にありえない。

小雪のなか、おれはコンパスで方位を確認してから、重たい足をひきずるようにして歩きはじめた。KGBも予算節減にはげんでいるのか、支給されたコンパスは子供の玩具みたいな安物で、故障していないかどうか心もとない。

鬱蒼と繁る針葉樹の森の切れ目に、灰色の岩膚

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

をみせて険しい岩山が聳えている。山頂まで、麓から三百メートルはあるだろう。岩山をめざして、倒木を乗りこえ、腐食土の大地に足をとられながらも歩き続ける。

幸運にも、まだシベリアオオカミには出喰わしていない。連中が、このあたりに生息していないわけではない。毎晩のようにおれは、背筋が寒くなるようなオオカミの遠吠えを耳にしているのだ。

もしも襲撃されたら、それで終わりだろう。闘志満々のシベリアオオカミの大群を相手にして、ナイフ一本で撃退できると信じるほど、おれは非常識ではない。あと三日、おれが目的地に辿りつくまで、テリトリーを通過していく侵入者を無視してくれと祈るだけだ。

昨日までに、直線距離で七十キロは稼いだ計算になる。山や谷や湿地帯を迂回してきたから、実際の歩行距離は二百キロを超えているだろう。それでも、残りはあと三十キロ前後だ。どんな迂回路を強いられようと、計算では三日もあれば行きつける。

心配なのは、まだ頭上で散らついている小雪だけだ。このまま大雪になれば、あらゆる計画が土台から狂いはじめる。だが、そんなことはないだろう。ここはシベリアの高緯度地帯だが、とにかくまだ九月なのだ。

今日中に、前方に聳える岩山の頂上まで登ってしまおう。方位を誤って、とんでもないところに迷いこんでいる可能性は、まずないと思う。

それでも見晴らしがきく高地から、目的地の発着場の位置を確認しておくのが妥当な選択というものだろう。支給された安コンパスが、狂っているかもしれないのだ。

山頂まで辿りつけば、残る旅程は二十キロほどになる。あれだけ大きな森のなかの広場だから、山頂から見のがすことはあるまい。

湿地帯をぬけるのに、予想以上の時間が必要だった。岩山の麓は東から西まで、沼と軟泥の危険地帯に覆われていたのだ。日暮れまでに岩山の頂上に登るという計画は、これでは放棄せざるをえない。どうにか湿地帯を越えた地点で、今夜の野営場所を決めるしかないだろう。

今日、狩りをしている余裕はなかった。沼の水と積もった雪で、空き腹をなだめるしかない。うんざりしながら、そう考えていたときだった。原生林の彼方で、異様な叫び声が響いた。たしかに人間の声だった。

枯れ枝を蹴ちらし、倒木を踏みこえて、おれは叫び声の聞こえた方向めがけて疾走した。まもなく木立のあいだに、人影らしいものが見えはじめる。

下生えに身を隠しながら、音をたてないように注意して、現場にむけ這いすすんでいく。相手が何者であろうと、無警戒に自分の存在を誇示するような真似は、絶対にしてはならないのだ。なにしろ学校の教科書に、そう書いてある。

「なにをするの」

雪の紗幕の奥で、若い女の声が響いた。吹雪は夜になるにつれ、さらに激しくなりそうな気配だ。天候の急変に、おれは動揺していた。絶対に、自分だけは生きのこれると信じていたサバイバル・テストだが、季節はずれの大雪という異常天候までは計算していない。

藪の陰から、樹林のなかの空き地をながめる。おれは、そろりと唇を舐めた。登場人物はどちらも、おれが知っている男女なのだ。

カールが槍の穂を、大地に倒れたルーホアの喉に押しつけている。よく見ると、それは槍ではない。サバイバル・ナイフを、削った木の枝の尖端に固定して、槍まがいの武器にしているのだ。ルーホアは、太腿から出血していた。槍で刺されたらしい。

「おまえも馬鹿だな。女が男とおなじ条件で、サバイバル・テストに勝ちぬこうというのが、そもそも誤りなんだ。

この雪を見ろ。おまえもおれも腹のなかで練っていた計画は、これで土台から倒壊した。どう考えても、おれたちはヘリのところまで行きつけない。雪がやみ、雪がとけるまで、ここに最低で三日は足どめだ」

おなじ中心点をめざしている以上、Aクラスで最初に降下したカールと、次に降下したおれと、最後に降下したはずのルーホアだが、中心点にむけて前進すればするほど、たがいの距離はしだいに接近していく。

それぞれ選択するコースが直線状でありえない以上、目的地に到達する以前に、たがいのコースが交差するというのも、充分にありうることだ。おそらく、あの岩山に登るのが正しい選択だという判断で、おれたち三人はおなじような地点まで、知らないうちに引きよせられたのだろう。女が叫んだ。

「どうしようというの」

「その面相だが、どのみち東洋の雌猿だ。顔つきなんか、どうでもいい。おまえを裸に剝いて、強姦してやろう。それから、おまえを喰ってやる。その体つきなら、肉のほうはなかなか旨そうだ」

ルーホアは、さして警戒することなく、合図しているカールのところに姿を見せたのだろう。そこを、不意を突くようにして襲われたのだ。せいぜいゲルマンの土人だと思っていたが、カールの野郎は北京原人の水準まで退化していたらしい。

雪がやむまで狩りはできない。雪洞にもぐりこんでも、餓死する運命は見えている。そこに五十キロはありそうな、素敵な獲物が登場したのだ。やつは中国娘を裸にして凌辱したあと、殺して肉を喰うと宣言している。あの男なら、やりかねないことだ。

気丈な女だった。吐きたくなるような台詞を浴びせられたというのに、喉笛に押しつけられた槍をつかんで、もがきながらも立ちあがろうとする。カールの泥靴が、女の顔面に殺到した。大きくのけぞり、ルーホアが大地に叩きつけられる。

カールが槍の穂で、失神した女の胸を、腹を、股を、汚らしい手つきで触れていく。ルーホアは、まだ意識があるらしい。呻きながらも、槍の動きから逃れようとして身もだえている。

「カール、よしな」

おれは、身を起こしながら叫んでいた。やつが、驚いてこちらを見る。サバイバル・ナイフを手に、森のなかの広場に乗りこんだ。カールが槍をかまえながら、厭らしい薄笑いを頬にきざんで、こちらを見すえる。

「素敵な一日だぜ。東洋人の猿は、股をひらいて命ごいしてる雌だけでなく、呼ばれもしないのに殺されるため、阿呆な雄までおれの前に這いだしてきた。どちらも、地獄の釜のなかに蹴おとしてやろう」

「ふざけるな」

眼前で火花が散った。やつが繰りだした槍の穂を、おれのナイフが渾身の力ではらいのけたのだ。

やつもおれも、本気だった。これまではキャンプ内の私闘だったから、たがいに微妙なところで手加減していたような気がする。相手を殺してしまえば、加害者である自分のところまで影響がおよんでくるだろう。KGBも、文字どおりの殺人狂を養成しているわけではないのだ。

どんな理由があろうと、クラスメートまで殺しにかかるような人間は、工作員として失格だという判定が下されるに違いない。工作員には、自分の感情をおさえつける能力が、まず前提として要求されるのだ。

槍の穂先が、左脇腹をかすめた。おれはカールの槍を抱えこみ、そのまま大地を蹴って、やつの

胸元めがけて殺到した。獣じみた絶叫が響きわたる。鋭利なナイフが、真正面からカールの心臓を抉ったのだ。

真冬みたいな猛吹雪が、大地を揺るがしている。そろそろ日暮れだ。藪の陰にもぐりこみ、おれは膝を抱いて蹲っていた。

「あんた。どうして、わたしを捨てていかないの」

ルーホアが嘲るようにいう。負傷した腿を布切れで縛り、やはり藪のなかにもぐりこんでいる。こんなことをしているわけにはいかない。せめて、今夜のために雪洞でも掘らなければと思うのだが、無気力感に全身が沈みこんで、なにもする気になれない。

「理由なんかないさ」

おれが呟いた。女が、さらに意地のわるい口調でいう。

「わたしが普通の顔なら、平気で捨てられたのにね」

「どういうことだ」

「同情したのよ、こんな顔だから。並はずれて醜い女だから、あんた、どこかで負い目を感じてるんだわ。それが影響して、つまらない自己犠牲精神なんか発揮したりする」

「なめるな」

どこからそんな力が湧いてきたのだろう。叫びながら、女の唇を奪っていた。ルーホアの皮肉な言葉に、なにか憤激に似た感情があふれ出したのだ。

どうしてそう思うんだ、おれをなめるな。同情なんかでは、おれは小指一本も動かさない。捨てるか捨てないか、それはおれの自由だ。なにか自分にとって大切なものがあると感じたから、おれはそうしたんだ。そんな気持ちを、聞いたふうな言葉で侮辱するな。

吹雪のなか、夢中で女の戦闘服を剝ぎとっていた。女は死体のように無抵抗だった。馬鹿なことをするなという囁きが、遠くの方から聞こえてくる。うるさいと、おれは夢中で怒鳴りかえしていた。

おれにもルーホアにも、無駄にできる体力など一滴も残されていない。それなのに全裸で、犬みたいに雪のなかを転げまわる。生存のための計算を超えた激情が、おれを捉えつくしていた。

どろどろの熔岩が、白濁して女の体内に注ぎこまれた。あえぎながら、おれは野獣のようにしなやかな裸体を組みしいていた。寒気の体感とともに、理性がもどりはじめる。萎縮した男根が、まだ熱い女の谷間から押しだされるのを感じて、おれは呟いていた。

「我慢できなかったんだ。すまなかった」

おれには判らない言葉で、女が囁きかけてきた。やさしい声だった。これほどに魂の底までしみるような、やさしい女の囁き声は聴いたことがない。ルーホアが、おれにも判る言葉でくり返した。

「あなたが悪いんじゃない。卑劣な男ばかり見てきたから、つい、あんなことをいってしまったの。あなたは残酷な獣だけど、正直でやさしい。わたし、判ってるわ。

いつかあなたを、かならず救けるわ。もう一度、あなたに体をひらくときがくる。それまで、わたしのことを覚えていて欲しいの」

おれたちは体を離し、散乱している着衣を身につけはじめた。吹雪の白い紗幕にかすんで、美しい裸身が身をくねらせている。てきぱきと下着をつけ、服を着ていくルーホアの身ごなしは、つつましげで優雅だった。

おれには、はじめての経験だった。たんなるセックスなら、飽きるほどに体験してきた。だが、違うのだ。命と引き換えというほどに激しい官能の高揚は、それが生まれてはじめての経験だった。

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton